

# アマチュアリズム下における日本サッカー界と

## サッカー移民の関係性

スポーツ文化研究領域

5020A020-5 小川 剛史

序章

1995年のボスマン判決以降、サッカー界において世界中で外国籍選手が自国を離れて重要な役割を与えられ活躍する事例が増加してきた。サッカー界にはボスマン判決以前でも、外国籍選手をクラブとリーグが受け入れ、そして様々な制限をかけてきた歴史がある。

現代においても国内サッカー界と外国籍選手との関係性については頻りに議論され、国内リーグのルール変更が行われている（Jリーグは2019年に外国人枠3人+アジア枠1人からアジア枠が廃止され、J1では最大5人、J2,J3では4名に変更）。

1965年に日本サッカーリーグ「JSL」という日本スポーツ界で初のアマチュア全国リーグが設立、1967年から外国籍選手が来日し活躍してきた歴史がある。

しかし、国際的にも外国籍選手の重要性は認知されているにも拘らず、日本サッカ

研究指導教員：石井 昌幸 教授

一界における外国籍選手の影響と日本サッカー界との関係性に関する研究は少ない。

本研究では「日本サッカー界とサッカー移民がどのような関係性を築いてきたのか」という問いについて答えていきたい。

1章

1960年代の日本代表はオリンピックで成功をおさめたが、1970年代までの日本サッカー界は、日本蹴球協会による「トップダウン」での強化をおこなってきたことが背景にあり、そのためにJSLの運営と日本蹴球協会（日本サッカー協会）の強化方針が噛み合わず停滞してしまっていた。しかしその一方で、プロを志向するチームの出現から協会に依存せずに練習環境の整備が行われ「ボトムアップ」的に日本サッカーが進歩していくようになった「変革期」だったのではないかと考えた。

2章

日本サッカー界が「冬の時代」とされる

中で、サッカー移民が導入されていく。サッカー移民導入チームは他のチームと比べて若く、現代のプロ的なチームの指針を持ち、サッカー移民らは若い選手たちの手本となった。その一方で他のチームはプロとアマの曖昧な状態に不満を持っていた。

その結果日本サッカー界で「スペシャルライセンスプレーヤー」制度が生まれプロが認められた。

### 3章

1960年代以降の日本サッカー界において、サッカー移民たちが日本にやってきた理由は、ブラジル日系人社会に置いて「自分の子供がプロサッカー選手になることは忌避すべきこと」だったということ、「両親が日本に対して好印象を持っていたこと」が大きなポイントになっている。というのも当時の日本は世界的に見ても高度経済成長期にあり、自分の子供が「海外進出するほどの大企業で仕事を覚える」という意味でも、「ブラジルと比べて安全な母国に帰る」という意味でもポジティブな側面を多く持っていた。サッカー移民本人にとっても、プロサッカー選手を目指すことは嫌われており、全力でプレー出来る環境ではな

かったことがうかがえる。その中で日本にやってくることは、日本の大企業で正規雇用を獲得しながら、のびのびとサッカーに打ち込むことが出来る環境は理想的なものだったと考えられる。また、導入チームからしても日系サッカー移民らはアマチュアリズム下の日本において血縁的に日本人であるため、受け入れやすい存在だったことが分かった。

### 4章

アマチュアリズム下における日本サッカー界でサッカー移民は「文化的な普及と日本のサッカー観を変化させたことへの寄与」し、また、「アマチュアリズム下でプロ志向チームの象徴的役割」を担っていた。

結びに変えて

本研究ではブラジル日系人社会と日本の関係性だけに重点を置いていたこともあり、本研究のテーマに完全に答えられている訳ではない。そしてその関係性や功績をしめした資料がまだまだ不十分であるため、今回明らかになった資料に加えて、より多角的にサッカー移民と日本の繋がりを論じていく必要がある。